茨城県立図書館ボランティア会通信紙

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオランタス」
ラテン語でボランティアの意

No.63(2022.4.20 刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

特集 通信紙「カガヤキ」の感想と提言

苦難と気持ちを寄せ合うこと

東大名誉教授(宗教学)

島薗　進

東日本大震災と福島原発災害から 11 年が経過した。この災害は日本における宗教と社会の関わりに新たな展開をもたらした。思いもかけぬ恐るべき津波により多くのいのちが失われたことは、多くの人々の心を揺り動かし、犠牲者への慰霊・追悼の念とともに、大切な人々を失った人々、多くのものを失い打撃を被った方々への思いやりの気持ちをよびさまさした。それは宗教の意義、祈ること、目に見えぬものを思うことの意義を自覚されるものであった。

多くの人々が支援活動のために被災地に向かったが、多くの宗教者や信仰者集団もそこに加わった。教団に属する人々のケアや布教活動ではない、公共空間での活動が宗教的にも大いに意義あるものとして受け止められるようになった。そこから新たに宗教団体の枠を超えて支援活動を行い、慰霊・追悼の思いをともにしようという動きも活発になっていった。

すでに 4 月には被災地に近い仙台では、「こころの相談室」が発足し、宗教協力による支援活動が取り組まれるようになっていた。また、東京では宗教者災害支援連絡会が立ち上がり、宗教宗派の違いを超えて情報交換を行い、ともに支援活動に取り組むことも試みられた。そこではイスラーム系の団体が加わったり、政府や行政の担当者が加わってともに話し合う機会ももたれた。宗教研究者もそこに加わり、媒介者的な役割を果たそうとした。

宗教協力による災害支援の展開

よく知られるようになった宗教宗派を超えた支援活動の一つは「カフェ・デ・モンク」で、さまざまな立場の宗教者や信徒が避難所や仮設住宅などに出向いて、被災者の話を傾聴し、心和むときをもとうとするものだ。これまで病院でチャプレンとして宗教者が活動しようとしてもなかなか実現しにくかったのだが、被災地ではそれが抵抗なく実現するようだった。

こうした動きを踏まえて、仙台に位置する東北大学を拠点に臨床宗教師の養成が行われるようになった。これは仙台で在宅医療にあたっていた岡部健医師が提唱したものだが、僧侶や神父・牧師などの宗教者が特定宗教の立場に依拠しないスピリチュア

ルケアを行うための資格を認定しようというものだ。これは2016年から実際に行われ、日本臨床宗教師会が発足した。

こうした国内での宗教協力の動きは、同様の国際的な動向とも響きあうものだった。2004年のインドネシア沖の大地震では津波による膨大な被害が生じ、2010年ハイチの大地震でも甚大な被害が生じたが、これらに対して世界の諸宗教関係者が支援の手を差し伸べる動きもあった。2015年3月には、仙台で第3回国連防災会議が行われたが、「防災と宗教」と題されたシンポジウムにはハイチのカトリック教会やインドネシアのムスリムの代表者も交え、今後の防災における宗教の役割、また宗教協力のあり方について話し合われた。

2010年代の後半も、日本では熊本地震や西日本各地での豪雨災害などが相次ぎ、宗教協力による支援活動は持続的に行われてきた。また、それにとどまらず、宗教者による社会福祉的な活動やさまざまな困難を抱える人々へのケア活動の活性化が続いているようだ。たとえば、寺院や教会で子ども食堂を開く例、路上生活者を支援する活動、自死念慮者や自死遺族への支援、死別の悲しみを抱えるひとへのグリーフケアの集いなどがある。こうした活動では、宗教的メッセージを伝えるより、人々の苦に向き合い、それを軽減する活動に取り組むとともに、苦のスピリチュアルな次元に対して傾聴・寄り添いを主軸にしたケアを行うものが多い。

新たなグローバルな災厄の時代の宗教協力

では、新型コロナウイルス感染症が脅威となり始めた2020年以来はどうか。まだ、2年足らずの時を経過したに過ぎないが、これまでのところ宗教を背景にもった支援活動や宗教協力があまり目立たないようだ。そもそも新型コロナウイルス感染症の流行時には宗教的な集会が持ちにくく、したがってともに行う宗教活動そのものも自粛せざるをえない状況が続いている。また、新型コロナウイルス感染症の犠牲者を弔う儀礼自体も部分的に省略したり、少人数でせざるをえない状況だった。

すでに日本でも2万8千人を超える死者が出ているが、新型コロナウイルス感染症の犠牲者をともに弔う機会そのものももたれていない。これは米国、英国などとは異なる状況だ。そもそも犠牲者の数が欧米諸国に比べれば相対的に少ないという事態も関係しているかと思われるが、宗教者が宗教宗派を超えて死者をともに弔う行事はないわけではないが目立っていない。

新型コロナウイルス感染症は世界がほぼ同時にグローバルな災厄に見舞われるという点では、世界史上、新たな事態かもしれない。1920年前後のいわゆるスペイン風邪のときと比べれば、人類がひとつの共同体をなしているという意識は格段に高まっている。しかし、それにもかかわらず、世界の諸宗教がこの災厄にともに向き合おうとする動きは今のところ目立っていない。

気候変動や地球温暖化とグローバルな環境変化による災厄が目立つ時代だが、東アジアでは宗教者や諸宗教団体がこうした動向にどう向き合っていくのか。宗教宗派の枠を超えるとともに国境を超えた協力がどのように進んでいくのか、今後の大きな課題である。

組織の価値を高める内容に共感

茨城県立石岡支援学校
(前県立図書館普及課)
大槻晋吾

まず、初めに、平成27年度から県立図書館ボランティア広報担当として、読み応えのある通信紙を発行していただき、感謝したい。

私も、今までに、通信紙〇〇〇便りや広報紙を作成したことがありますが、改めて調べてみると、

> 広報誌とは、企業や団体が、顧客や市場、組織内の人達に向けて、あるいは、自治体が地域の人達に向けて製作・発行する冊子のこと。 主に、企業・団体・自治体が行っている活動や、組織を構成しているメンバーの動向などを広く伝えて、知ってもらうことを目的に発行される小冊子のこと、

とあった。その意味合いから、広報誌の目的は一般に、

①「その団体（企業、業界、同人など）の取り組み、社会（文化）的活動を広く伝えること」だと思う。もっと先の深いところまで言うと、

②「その団体の取り組み、社会（文化）的活動を広く伝えることで、共感や信頼を得て、団体のイメージや価値を高めること」になるのだと思う。

そこで、桜井さんがとりまとめて発行していただいている通信紙は②の部分の「ボランティア」という団体・組織の価値を高める内容や共感を得られる内容が書かれていると思う。私が担当していたならば、到底、同じような仕上がりはできないと常々思っていたが、・・・。

恐縮だが、お願いごととして、県立図書館の宣伝も時々、掲載させていただけると、ありがたい。

リモート社会の功罪

読者A

茨城県立図書館ボランティア通信紙「カガヤキ」No.53（2021年2月15日発行）に、リモート会議の功罪についての記事が掲載されていたので、コロナ禍が招来したリモート社会についての筆者自身の所感を述べてみたい。

筆者の所属する日本建築学会でも、2年前より大会をはじめとする多くの会合がオンラインで実施されている。コロナ禍以前は、大会に参加するとなると、数日間オフィスを離れ、その間多くの業務を中断せざるを得ないが、オンライン開催では、大会期間中でも、業務を継続することができるようになった。学会の大会に参加しても、自身にとって、聴講したい発表は、ごく一部であるが、オンライン開催となってからは、関心のない発表は、聴講せず、その間に、業務に専念できる。

大会期間中に、本来なら出張しなければならない用件があった場合、どちらかの出

席は、断念せざるを得なかったが、オンラインでの開催となれば、若干のスケジュール調整で両方に出席することができるようになった。会議で質問したい場合でも、時間の都合上、許可されない場合があるが、チャット機能を使うことで、質問することもできるようになった。出張に要する費用が節約できるため、余った予算を他の支出に振り替えることができる（運輸、旅行業界にとっては大きな損失であるが）。

コロナ禍以降、出張に要する時間が節約でき、また、オンライン会合中も内職ができるようになったことで、作業効率が大幅に向上し、仕事の出来高も約 1.5 倍になった。複数の会合に同時に参加したこともある。オンライン会合は、コロナ禍でやむを得ず始まった新形態ではあるが、実際に実施してみると、その利便性に多くの人が気づいたはずである。コロナ禍が終息しても、オンラインを活用した会合の形態は継続するであろう。某学会でも、大会は、従来形式とオンライン形式とを交互で実施することになったそうである。

しかし、負の側面も多々あることも事実である。まず、顔を見ての人的交流がなくなったことである。発表している途中で聴衆の反応が分からないため、このまま喋り続けるべきかどうか判断に迷うことが多々あった。オンライン設備の不調があるとまったく何もできなくなることがある。聴衆が、回線に接続したまま、離席や居眠りや内職をしていても分からない。安全教育など、聴講義務がある会合の場合は、これは致命的であるが、その場合は、オンラインでテストを課すことで、その問題点を克服する方法もある。

大阪市立大学名誉教授の井上正康氏（分子病理学）によると、専門医に義務づけられている学会参加も、オンライン開催になったために、専門医がウイルスやワクチンに関して、最新の知見に基づく正しい知識を得る機会が喪失し、政府や新型コロナウイルス感染症対策分科会や自称「専門家」の情報をそのまま鵜呑みにして、正しい診療が行われておらず、ウイルス禍を拡大させている由々しき事態となっているとのことである。

人の移動が減ることで、運輸、旅行業界も供給能力を削減せざるを得ず、いざ、移動、宿泊をすることとなった場合は、減便や宿泊施設の不足などで利用者の側が不便を被ることとなる。

リモート社会が、社会構造の大きな変革をもたらすことはいうまでもない。アフターコロナに向けて、いかにして功を活かしつつ罪を低減させていくかに知恵を絞るフェーズに入っている。

特別企画

教科書「哲学」の神と位置づけ 総論

宗教研究者(曹洞宗雲水)
桜井　淳

はじめに

大学の科目には、一般科目と専門科目があり、前者は、教養科目とも呼ばれ、社会を正しく理解するための「法学」「政治学」「経済学」「哲学」「数学」「物理学」「化学」や「英語」「ドイツ語」「フランス語」などの「語学」、後者は、学科ごとの専門科目である。

「哲学」の標準的な教科書では、どのような神を採り挙げ、何を論じ、人間との比較において、どのように位置づけたのであろうか？

そして、「神仏論」と「ボランティア論」には、どのような関係が存在するのか、考察してみたい。

なぜ特定の神なのか？

手元にある古い「哲学」の教科書では、歴史的に、「古代の哲学－存在の問題－」、「中世の哲学―神の問題―」、「近世の哲学―知識の問題―」、「現代の哲学―人間の問題―」と分類している。

「中世の哲学」では、一般的な神ではなく、特定のキリスト教の神、それも、三位一体(「主と神の子イエスと聖霊」の再定義)の神と位置づけられているイエス・キリスト(「キリスト」とは唯一という意味の敬称であり、「イエス」が氏名、そのため、正式には、「キリスト・イエス」と記すべき)を採り挙げている。

特定のキリスト教を採り挙げているのは、歴史的経緯から、中世の欧州における社会的影響力の大きさのため、第一の存在として、扱わねばならないためである。神の問題の一般論からすれば、神は、何でも良いのである。

「中世ではキリスト教は全ヨーロッパの人々をカトリック教会のもとに統一するが、真の教会のしるしは公同性(普遍性 catholic)であるとされる。」(教科書 p.84 より) しかし、キリスト教は、歴史的に、マルーティン・ルターによる宗教改革により、カトリック系とプロテスタント系(protestant、語源はラテン語の抗議の意、「聖書」に忠実な福音主義)に棲み分けした。現在、前者は、キリスト教信者の約 30%、後者は、約 70%を占める。

神と人間の比較

「哲学」の教科書では、なぜ、神を定義し、論じなければならないかと言えば、人間は、不完全な存在であるため、完全な存在を定義し、わずかでも、その方向に近づくためである。

人間と神との対比は簡単なモデルで示すことができる(教科書 p.89-90 より)。

人間

「精神・認識・愛」「存在・知・意欲」「記憶・知性・意思」

神

「絶対精神・絶対認識・絶対愛」「絶対存在・絶対知・絶対意欲」「絶対記憶・絶対知性・絶対意思」

「神仏論」と「ボランティア論」の関係

「神仏論」の基本的戒律は「十戒」「十善戒」「六波羅蜜」である。簡単なようで、誰ひとり守れない。

ヘブライ語の「聖書」に記るされた「十戒」は以下のとおりである。

・他の神々があなたのためにわたしの面前にあってはならない。
・あなたは自分のために像を作ってはならない。
・あなたは、あなたのヤハウェの名を、空しいことのために唱えてはならない。
・安息日を覚え、これを聖別しなさい。
・あなたはあなたの父と母を重んじなさい。
・あなたは殺してはならない。
・あなたは姦淫してはならない。
・あなたは盗んではならない。
・あなたはあなたの隣人に対し、偽の証言をしてはならない。
・あなたはあなたの隣人の家を欲しがってはならない。

仏教の「十善戒」は「聖書」の「十戒」に似ている。「十善戒」は「不殺生」「不盗」「不邪淫」「不妄後」「不綺語」「不悪口」「不両舌」「不慳貪」「不瞋恚」「不邪見」なる戒めである。仏教の「六波羅蜜」は「布施」「持戒」「忍辱」「精進」「禅定」「智慧」である。

「神仏論」と「ボランティア論」の関係とは、特別なことではなく、「十戒」「十善戒」「六波羅蜜」に見られるごく当たり前の基本的なモラル(moral, 人生や社会に対する精神的態度)のことである。しかし、最終的に目指すものは、「絶対」に限りなく近いモラルである。

結びに代えて

欧米では、ボランティア活動は、当たり前のことであり、母親が小さな子供を連れ、週末を楽しむかのように、作業に参加する。それらの人達は、ボランティアについて、特別なことなど何も知らず、知ろうともしない年齢である。しかし、一般論として言えることは、誰しも、人生の後半に差しかかる頃になると、具体的には、母親であれば、子離れが進み、時間に余裕ができ、父親であれば、定年が、そう遠くない将来に考えられるようになると、人生でやり残したこと、ボランティアの社会的位置づけ、それに対する自身の役割や目的について、考えるようになる。

私は、これまで、ボランティアと言うのは、表面的な他者への奉仕ではなく、仏教の六波羅蜜のひとつである「布施」(これには、「財施」(ものを施すこと)、「法施」(教えを説くこと)、「無畏施」(不安をなくすことがある))、すなわち、他者への奉仕ではなく、自身の徳を積むための自発的な行為であると言う論理展開をしてきた。私は、本稿において、初めて、「布施」なる論理を超越し、世の中の「哲学」の教科書における神仏と人間とボランティアの関係を結びつけることを試みた。まだ、頭の中のイメージをそのまま記したにすぎず、体系化や論理展開が、不十分なままである。そのため、意識的に、「総論」と位置づけ、宗教研究者との討論を重ね、やがて、「詳細論」の展開を開始したい。

編集後記

通信紙「カガヤキ」掲載記事の構造分析
－試みと成果と反省とこれから－

試みと成果

通信紙 No.25 から担当した第三代目の編集者として、いくつかの試みを実施しましたが、最初に実施したことは、①記載内容と表現法のレベルを上げること、さらに、②発行目的と編集方針を明確にすること、具体的には、③ボランティア活動内容と実績を「年次報告」として、④ボランティアの経験を「ボランティア論」として、⑤ボランティアの活動を「社会科学研究」として残すことでした。

これまでの「年次報告」のまとめ方と内容は、軌道に乗せることはできたものの、理想から乖離し、必要最小限の作業報告に留まっており、今後、文章表現を含め、さらに、工夫する必要があるように思えます(通信紙 No.25, 39, 43, 49, 56, 61)。

「ボランティア論」は、特別なことではなく、ボランティア各自の体験や感想や記録として残しておきたいことなどをエッセーとしてまとめることであり、次世代のボランティアを養成するための種蒔きのような作業です(通信紙 No.26, 27, 30, 34, 36, 40, 55, 59)。編集過程で最も工夫したことは、恒枝篤史「牧師としてのやりがい」(通信紙 No.36)のオリジナル原稿の質の高さに対する取り扱いであり、そのまま、全文、編集することなく掲載した際、ボランティの間に生じるプラス面とマイナス面に対する配慮であり、思い悩み、世の中の普通のボランティの考え方に可能な限り近づける内容にし、それでも、最初の質とオリジナリティと特徴を生かせるようにすることでした。

ボランティアにかかわる「社会科学研究」では、社会科学の研究手法を採用し、ボランティア活動のメカニズムを解明し、体系化することでした(通信紙 No.31, 33, 39, 48, 51, 52, 53, 54, 55)。研究に必要な基礎データの大部分は、県立図書館側が管理しており、ボランティア側が入手できないもどかしさもありましたが、今後、可能な限り、基礎データを入手し、より広範囲にわたる深い調査と考察を進めたいと考えています。

試みとして、あえて、さらに、ひとつ追加するとすれば、すべてのボランティアに最高の倫理の実現のため、一般論として、仏教の「徳」やキリスト教における「犠牲」(仏教では「徳」を積むための奉仕)についても、包括的に、追究する研究小論も含めました(通信紙 No.34, 36, 55, 61, 62, 63)。

反省とこれから

通信紙 No.25 以降、7 年経た現在、反省すべきことを整理すると、第一に挙げなければならないことは、原稿執筆者は、特定のボランティアに偏ることなく、ボランティア全員になるような配慮であり、第二には、原稿の質をそろえるため、聞き取り調査を基にしたまとめ、第三には、誰でも、自由に、さまざまなテーマで、原稿を投稿できる雰囲気づくりをすること、そして、第四には、次世代の編集者を育て、継続的発展が可能なようにしておくことです。

桜井　淳